



TITLE:

<批評・紹介> 稲葉岩吉著 「魏志倭人傳管見」

AUTHOR(S):

小野, 勝年

---

CITATION:

小野, 勝年. <批評・紹介> 稲葉岩吉著 「魏志倭人傳管見」. 東洋史研究 1937, 2(4): 381-382

ISSUE DATE:

1937-04-28

URL:

<https://doi.org/10.14989/138743>

RIGHT:

## 魏志倭人傳管見

稻葉岩吉著

史林第二十二卷第一號

「三國志」魏志倭人傳の記載は周知の如く其内容が我國に關した古く而も稍々詳細なものである點から、松下見林の「異稱日本傳」以後本邦史界に注意され、これに關する論著は頗る多い。其問題の動向に就いては

曾つて末松學士が「青丘學叢」<sup>二</sup>號に紹介され、其後橋本教授の如きは二十年に亘る氏の研究を收めて尨大な書籍を刊行して居る。されば倭人傳の研究は現在殆んど論究しつくされた感があり、問題として残つたものは結局解釋立場の相違に過ぎないかに考へられた。然るに今度稻葉博士は「魏志倭人傳管見」なる題目のもとに新見解を發表された。其主張する所は從來の研究は要するに國史照合の事のみを重點を置いて居るが、寧ろ此等は二義的な問題で「魏人の眼に映じたところの日本の姿は如何なるものであつたか、大陸の人々は總じて如何なる態度を以つて、當時の日本を眺めたものであるか」を開明するに在りとされる。博士の説く所に依れば、魏は遼東の公孫氏を討伐し、樂浪・帶方二郡を收復し、更に高句麗を討伐して東方經略を行つた。是より先公孫氏と南方の呉とは通交し、更にこれを契機として呉は高句麗とも通ずるに至つた。而も通吳の形勢は東夷諸國に共通する所で、東方進出を策する魏にとつては頗る障害とならざるを得なかつた。されば魏は高句麗討伐に際して、倭と結んで遠交近政策をとることとなり、先づ帶方郡太守をして親倭の外交

工作を行はしめた。即ち景初三年六月、倭の女王が帶方郡に大夫難升米を遣はしたのは此事情に基く。當時倭國は使譯の通ずる所三十國に及び、耶馬臺に都した女王國に對しては狗奴國があつて相攻撃したが、それにも拘はらず倭人の發展は朝鮮半島に及び、其南部は彼の領有する所であつた。されば魏は海表に勢力を振つた倭と結び東方に於ける海陸制覇を策したのに外ならぬ。要するに魏志東夷傳の記述はかゝる政治上の情勢の然らしめたものである點を看取すべきである。從つて東夷傳中の倭人の記事も夫餘・高句麗・韓等との一聯系の下に理解すべきで、そのみを切離して別個に取扱ふ可きではない。以上は所論の概要であるが、猶「漢委奴國王印」の讀方に就いても委奴〔*ya-dno*〕がヤマトの省略とされ、又亡人説話の系統に關しても其造詣の一端を披瀝されて居る。

偕て讀後の感想を一言するならば、我國史との關係に於て倭人傳のみを切離して論究した從來の立場を止揚して、支那史書構成の立場に還り、これから東亞諸國の聯系に於て記事を理解せんとした意圖は確かに傾聽に値ひすると思ふ。然しかゝる解釋の仕方其物は漢土

と四隣諸國との關係を論ずる際普通試みるところであつて別に目新しいものではない。されば國史研究の立場からは兎に角、東洋史研究の側からすると聊か物足りない感を與へしむることは蔽ひ得ないのではあるまいか。それと共に倭人傳問題も既にあらゆる視野から研究され、其爲百尺竿頭一步を出づることの如何に困難なるかが察せられる。猶窓を云へば從來の研究の結果を顧みてこれを整理し、其止揚す可き所以に就いて更に若干の紙數を費され度かつた。妄評多謝。

(小野勝年)